



信州大学医学部附属病院から留学支援を頂き、2011年10月からスタンフォード大学医学部 Immunology & Rheumatology に研究留学させて頂いています。

全米屈指の名門校スタンフォード大学はそのキャンパスも広大で、大学自体がスタンフォードという地名になっています。サンフランシスコから南東に約40マイル、日本企業が多く集まるサンノゼまでは更に南東約20マイルの位置にあり、この地域はベイエリアと呼ばれています。多くの先端技術企業が本拠を置くシリコンバレーの中心にあり、大学内は勿論、日々の生活でもハイレベルな科学技術の恩恵を感じます。Google や Apple の本社は自宅から車で10~15分程度の位置にあり、初めて社屋と敷地の広大さを目の当たりにした時は、世界をリードするIT企業のスケールを肌で感じました。それ故か、物価は大変高く留学の身には決して楽ではありませんが、高級住宅街で治安は大変良く、地元の人々の地域に対する誇りが伝わってきます。子供の現地小学校の評判も高く、分け隔てなく教育を受けられる環境には感銘を受けています。学校に通うことを心から楽しむ彼らの姿を通じて、素晴らしい地域に居られることを感謝する毎日です。

ベイエリアにおいて、スタンフォード大学は一つの文化であることを感じます。周辺地域を本拠とするSF ジャイアンツやOAK アスレチックス、SF 49ers の帽子やTシャツ姿を見かけることは勿論ですが、それと同等もしくはそれ以上に、「Stanford」のロゴが入ったものを身につけている人が多いことに気がつきます。学問だけでなくフットボールをはじめスポーツでも有名であることをご存じの方も多いと思いますが、「格好良い」イメージを持っている人が多い印象です。

さて私の研究室では、主に関節リウマチや巨細胞性

動脈炎の病態に関わるリンパ球機能やそのシグナル伝達の基礎研究を行っています。私には、制御性 CD8 T 細胞に関する研究課題が与えられ、同細胞による CD4 T 細胞の活性増殖抑制機序の解明を中心に日々研究に従事してきました。研究室のPIであるWeyand教授から、「帰国後に活用できる知識を身につけて帰りなさい!」と提示されたのが始まりでした。制御性 T 細胞は免疫系の抑制・調節機能を有し、免疫異常から生体を守る重要な働きをする細胞として知られています。特に免疫系の自己過剰反応を原因とする膠原病の病態を研究する上で、大変重要な役割を担う細胞であることが考慮されます。いくつかのサブセットが報告されている中で、この「制御性 CD8 T 細胞」は私が渡米する数年前に当研究室が発見したものであり、やりがいのある課題を与えてもらったと大変うれしく思いました。ところが当初はなかなか結果が出せず、定期的なミーティングは勿論、ボスの顔を見るのも大変苦痛であったことを思い出します。最近では徐々に結果も得られるようになり、充実した研究生活を送っています。現在、それまでの *in vitro* の研究に加えて、実際に生体での発現に関する研究も検討しており、臨床医の私には更に高いモチベーションを感じる毎日です。まだまだ課題は山積みですが、帰国後この経験を臨床研究に生かせるように精一杯励みたいと思っています。

ちなみに研究室は、世界各国から集まった10人の同僚で構成されています。ラボマネージャーやテクニシャンが居ないラボであり雑用も多いですが、言葉の壁や習慣の違いに戸惑いながらも、多くのことを学び刺激を受けています。個々に違ったテーマが与えられるため、ミーティングのプレゼンテーションを聞くことで様々な知識が得られることも私には利点です。

米国留学を通じて、自分自身そして若輩ながら外部から日本を見つめる機会を頂きました。研究で得られる知識は勿論ですが、医師として、また一人の人間として様々な観点から考え出すことが出来ることは、今後の人生において大変貴重であることを痛感しています。

最後になりましたが、留学の機会と多くのご尽力を頂きました池田修一教授はじめ第三内科の皆様、また家族の渡米にあたりご配慮を頂きました皆様に、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

(2013年1月)

(信州大学医学部内科学第三講座所属)